

Book Review

『ケータイ小説的。“再ヤンキー化”時代の少女たち』

速水健朗

Hayamizu Kenrou

Mobile Society Review 未来心理 [13号] 掲載

2008年9月25日発行



BOOK REVIEW

著者インタビュー

『ケータイ小説的。"再ヤンキー化"時代の少女たち』

速水健朗 原書房刊

ISBN : 978-4-562-04163-3 発売 : 2008/06 ￥1,500 (税別)



しているのがケータイ小説である、とブログに書いたところ、原書房の方が、本にする話を持ちかけてくれたんです。

また、その頃ケータイ小説論が、新聞やネットレベルで出てきた。それを読んでみて「あつ、これはヤバイぞ。これは違うぞ、ケータイ小説を読んでもない人が書いてるな」と。

執筆動機の中には、ケータイ小説を読んでもない人が論じていることへの反発もあつたのでしょうか。

ケータイ小説をテーマにした書籍が多く出ていますが、本書執筆の動機や背景は。

二〇〇七年にケータイ小説がブックランキングの上位を占め、話題になっていました。自分でも気になる分野だったので、何冊か読んでみたくです。『この涙が枯れるまで』という作品で、登場人物の自我の獲得の過程が、アルバイトをして携帯電話を手に入れる過程になぞらえて書いてある。恋愛の機微や、アイデンティティの獲得といったモチーフを、携帯電話というツールを使ってうまく物語化

反発というか、僕自身もケータイ小説を全部読むのは辛かったですけど(笑)。みんな辛いから、一冊読んで好き勝手を言う人が出てくる。三冊、四冊と読むと共通点が見えてくる。じゃあ、五冊、一〇冊読むよ、という感じで始めたんですね(笑)。

元々女の子が教室で便箋をまわす文化があり、その流れから九〇年代のポケベルにつながり、PHS、携帯という流れがあつて、ギョウ文字にいく。この女の子のレター文化の流れの中にケータイ小説もあるというメディア論としてのケータイ小説解釈もできるだろうと。そして、僕自身の得意分野は、Jポップ、歌謡曲の歴史をメディア史的に読み解くこと。ケータイ小説の文化的な背景を見た時

に、明らかにこれは小説じゃないぞ、文学じゃないぞ、Jポップだと思つた。

読まれたのは、小説として出版されたものですか。

出版されたものを先に読み、携帯でも読まなきゃと、デバイスでも実際に読みました。『恋空』とか、デバイスで読むとぜんぜん違うんですよ。内容がカットされてたり、ニュアンスも違うし、両方読まざるを得なかったですね。

携帯で読むのが本筋だ、というのも一理あるんですけど、僕はそこはあまり重要ではないと思つています。中身だけ見るのがフェアだと思ひ、この本では携帯と紙との差異はいつさい取り扱わなかつたんです。

テーマは、郊外物語であり、ヤンキーの物語である。浜崎あゆみとの共通点があり、バックボーンは文学ではなく、少女マンガやJポップのポップカルチャーであると。四冊も読めば「浜崎あゆみ」というキーワードにたどり着くはずなだけけど、彼女の歌詞は広い世代に届いているわけではない。「ケータイ小説」にも、文化的背景はちゃんとありますよ」と誰かがきちんと言うべきだと思つたんです。

読者からの反応や、各種メディアでの反応はどうでしたか。

ブログでの反応は、すごく良かったし、早かった。

通常、ブログでの書評とマスメディアの書評はリンクしないことが多いですが、この本は結構、新聞や週刊誌、論壇誌などに取り上げられました。それでも、売れているというほどではないですが、売れていない割に話題が広がって、とくに出版関連の人たちは興味を持ってきています。主に、なぜ売れたのか、という部分に興味があるようです。

九〇年代以降書店が郊外化・大型化し、都市型の本屋がなくなつていきます。新しく生まれた書店の多くは、本と一緒にCDやゲームが置かれている複合型書店。書店の状況が変わつている中で、出版社はほとんど変わっていない。郊外型書店の文化が生まれ、そこにマッチした商品がケータイ小説だったんです。

ヤンキー文化に対する共感のようなものがあつたのでしょうか。

ケータイ小説は、僕が今まで扱つた中で、

一番面白いテーマ。単なる不良文化という狭い意味ではなく、九〇年代以降の状況から生まれている新しい共同体の在り方として、ヤンキーを再定義する良い機会だと思いました。一つは、ローカリティの問題で、地方に住んでいて、東京に対する憧れがない人たちの問題。憧れの東京といった感覚がなく、東京まで電車で一時間の場所に住んでいても東京に行かない。「電車に乗らない感覚」「東京に行かない感覚」と説明していますが、東京に行かなくても、地元が楽しいよ、という人たちが生まれている。

もう一つが、地元で共同体をつくること。友だちがいて、仕事も紹介してくれるような相互扶助的なコミュニティがある。そして、その地方共同体が、基本的に男尊女卑が当たり前の男社会でもあるのです。

現代的なヤンキー文化があり、それを下支えしているものが、携帯電話だったり、SNSだったりします。今の若者文化の特徴といわれている、濃密なメッセージは必要なく、常に「グルーミング的」、「毛づくろいの」（北田暁大）に、何も無いものをやり取りする関係性が重要視されています。

また、高校や大学などに進学してからできた友だちよりも、地元友だちが一番という、これまでとは逆転した感覚があつて、そのつながりは、携帯電話によってもたらされています。

自分たちが疎外されている、被差別者である、それに対して何かメッセージを発しなきゃいけない、というのが表現になります。自分たちへの差別を逆に表現に変える時に、文化が生まれるというのが、僕のざっくりとした解釈です。

ケータイ小説は、女の子が苦しみ、レイプされ、暴力をふるわれ、いろんなひどい目にあうという話。これは、地方で男社会の中の女の子の姿としてリアルであり、そこが共感を持たれやすい部分なのだろうと思つてます。

だから、ケータイ小説からいい作家が生まれ、芥川賞を取るかとは思つてないんですけど。ただ、ヤンキー文化への理解のなさは、常々思つていたことです。僕自身は、地方で生まれ地方で育つた人間ですけど、都会に逃げ出し、ヤンキー的な磁場から逃げ出した人間ではありませんけど。

●
これまで、映画や漫画がヤンキーを描いてきた。どちらにしろ、プロによるもの。ケータイ小説は、ヤンキー自身が自分たちを表現している。それも、非常に無意識の表現では。

ケータイ小説の作者たちは、元々小説を書いたつもりはなくて、自分の価値観を共感して欲しくて日記に書いていたら、人気になつて、出版された、という意味では、意識的ではなかったと思います。コミュニケーションでしかなかったものが、商品化されるようになった。

●
Jポップという言葉が生まれた九〇年代初頭のころから、歌手がアーティストと呼ばれるようになって、歌詞を自分で書くようになってきた。それ以前は、職業作詞家が書くのが当たり前でした。浜崎あゆみにしても、デビュー時から自分で歌詞を書く環境ができていた。アーティストという言葉が使われるようになって、流行歌はただの商品ではなく表現に

なつた。正直、浜崎の詞はつたない部分もあるけど、その方が生の声として、純粋な表現であるという受け止められ方をした。同じように、ケータイ小説というのは、書き手の生の表現であり、それが純粋なものであるという受け止められ方をしている。出版社が横組みのまま、文章に手を入れずに出版したのもその純粋さを尊重したから。それが功を奏した。

●
ケータイ小説というのは、日本独自の展開なのだろうか。

ヤンキーの少女側には、日本的な発展をした雑誌の投稿文化があります。そこに、日本的な携帯の発展、携帯コンテンツの発展があつたと思います。

インターネットのサービスは、日本も海外もそんなに変わらないです。海外で流行つたサービスは日本でも同じようなものが生まれる。日本のローカリティ、独自性というのは、携帯だからあるのかもしれない。

●
ティーン向けの少女小説や子ども向け雑誌の細分化など、ティーンをターゲットにした消費文化は、海外ではそんなに発達してないのでは。大資本が生み出す子ども向けの商品はあつても、みんなて小説みたいなものをつくり、それがミリオンセラーになる文化は、ちょっとアメリカではなさそうな気がします。

●
ケータイ小説やヤンキー文化の今後はどうなるのでしょうか。

●
僕が取り上げたようなケータイ小説の世界はすでになく、ヤンキー文化ですらない、普

通の小説の登竜門になっています。それはそれで面白いんですけど、ケータイ小説論として語れる類のものでないでしょう。小説は読まないけど小説家になりたいという人が多い時代なので、ケータイ小説のように、今までの小説を参照しない小説が生まれてきて、新しい文化をつくっていくのでしょうか。

●
僕はヤンキーという言葉をも、ポジティブな意味で使っています。近くの人たちが結びつくことで共同体が生まれる、共同体の再生産があるんじゃないかと。

●
今の世の中は、もう大量消費バンザイではなく、社会起業家を志したり、NPOに就職したりすることを希望する学生も多い。かつてのように給料が高ければいいんだという価値観は崩れている。ヤンキー文化は、そういう現代の消費傾向と親和性があるんじゃないかな。消費よりも仲間や家族を大事にすることが、受け入れられやすくなっている気がするんです。

●
速水健朗（はやみず けんろう）

●
一九七三年生まれ。石川県出身。フリーランスライター／編集者。パソコン雑誌の編集を経て、二〇〇一年よりフリーに。音楽、芸能、コンピュータなどの分野で執筆活動を行う。得意分野は、文化研究、郊外文化、ショッピングモール研究、メディア史、消費社会論など。

●
主な著作：「タイアップの歌謡史」「自分探し止まらない」「社内ブログ革命」など。

●
プロフィールは発行当時のものです。